

神戸市立博物館の活動目標と指標 24年度(2012年度)

使命(要点)

- 多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。
- 優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。
- 市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。
- 震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。

| 段階評価の基準(第1次評価) | | |
|----------------------------|---------|----------------|
| A | 達成率90%~ | 十分に目標が達成されている |
| B | 89~80% | 相当程度目標が達成されている |
| C | 79~60% | 目標の達成がやや不十分である |
| D | 59~0% | 目標の達成が不十分である |
| F | | 評価が困難等 |
| 「神戸市教育振興基本計画」の4段階評価の基準に準じる | | |

活動指針 ○市民が誇れる博物館 ○すべての人々に親しまれる博物館 ○地域の文化を支える博物館 ○情報発信をする博物館

| 活動目標 | | C 自己点検評価 | | | | | 活動 目標 | ◎ 時 活動 内 | ○ 戦 略 方 向 | □ 指 標 |
|---|--|----------|-------|---------|--|--|----------|-------------------|-----------------------|-------------|
| ◎活動内容【目標 計画】 | 本年度 参考数値 | 評 価 | | | コメント(必要な場合) | | | | | |
| ○戦略・方向性 □指標 | 参照比較値(過年度実績等) | 目標値a | 実績値 b | 達成率 b/a | | | | | | |
| 地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします | 中期的な調査研究テーマ「須磨」に関しては資料調査に進展があり、また地域資料の展示等による情報発信も企画展、特別展により一定の成果が得られた。また、地域資料も含め館の特色ある収蔵品に、重要な資料を10件を経常予算枠外で購入できたことは、大きな成果であった。今後の課題としては、より組織的な取り組みと活動を進める事が重要である。 | | | | | | A | | | |
| ◎調査・研究を積極的に行います | どうしても個人レベルでの取り組みに左右される傾向があり、偏りがでる。館としての調査研究能力の強化のためには、地域調査など共通テーマに対する組織的な取り組みに対するポテンシャルを高めていくことが必要だという理解とともに、それを実行していくための行動計画を提示して促す必要がある | | | | | | A | | | |
| ○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開 | 従前に比べ、調査件数、成果の発表などで活発に行われたことは評価できる。組織的な取り組みの点では依然として組織性・計画性においてまだ不十分なところがあり、引き続き改善を進める必要がある。 | | | | | | | | A | |
| □調査研究テーマの設定 | 妙法寺調査 2回 網敷天満宮調査3回 太山寺調査 3回 | | | | 年度当初にたてた計画のうち、資料調査については、ある程度達成することができ、来年度以降に対する見通しが立った。しかし、館藏品やそれ以外の須磨関係の資料の蓄積や、調査の情報発信などは達成できなかった。この点、反省し、来年度に反映させたい。 | | | | B | |
| □調査件数 | 20年度 51ヶ所 21年度 40ヶ所 22年度 39ヶ所 23年度 33ヶ所 24年度 69ヶ所 | | | | 1ヶ所の調査であっても重要な場合もあり、また館内での調査は対象外としているため、数字はあくまで目安程度であるが、4カ年を通して漸減傾向にあったが、本年は増加に転じた点、評価できる。人の偏り、公私のバランスなどの問題も含め、研究や展示の基本となる調査活動の活性化に向けて、条件整備や姿勢について改めて考える必要がある。 | | | | A | |
| □研究成果発信数 | 20年度 81件 21年度 67件 22年度 68件 23年度 69件 24年度 81件 | | | | 個人レベルを含めた研究成果の発信件数は、昨年に比し増加した。博物館としては、所蔵資料や関係作品の調査をもとに、紀要・目録・博物館だよりの刊行、展覧会の開催、図録の製作などを通じ、調査研究の成果を発信した。 | | | | A | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ◎地域の歴史に関する情報を発信します | 情報の発信は十分に行われているが、共有化の点では課題がある。そうした視点を含めての評価の方法を検討していく必要がある。 | | A | |
| ○有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開 | 地域史への対応は量的には例年並みだが、開館30年にふさわしく『桜ヶ丘銅鐸』を核に発信が行われ、総合案内『神戸市立博物館で楽しむ歴史と美』を発行し、ギャラリーでは地域を題材にした絵画作品の展示が企画されるなど、地域の博物館としての存在感を示し、役割を果たした。 | | | A |
| □自主企画の特別展・企画展の開催 | 21年度：特別展2回、企画展4回、ギャラリー3回 22年度：特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回 23年度：特別展2回、ギャラリー3回 24年度：特別展1回、ギャラリー3回 | 特別展「国宝桜ヶ丘銅鐸のなぞに迫る」では、桜ヶ丘銅鐸を核に里帰りの銅鐸など貴重な借用資料を加えて、桜ヶ丘銅鐸の発見の経緯と銅鐸にまつわる基礎知識と最新の研究成果を提示しながら、多くの謎に包まれた銅鐸の実態に迫ることができ、有意義であった。またギャラリーでは「港都・神戸」「大正時代」をテーマに懐かしい風景を版画作品を中心に紹介、また「絵画コレクション展」では神戸ゆかりの画家の作品を展示し、好評を博し得た。 | | A |
| □その他関連事業の開催 | 平成24年度おもな実績：ミュージアム講座6回のうち1回。博物館を楽しむ3回のうち3回。こうべ歴史たんけん隊1回。古地図企画展やギャラリー展示での学芸員によるギャラリートーク4回など。 | 特別展「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」を中心に、古地図企画展「海と陸の「みち」」、ギャラリー「絵画コレクション」等に関連付けた事業を積極的に開催することができた。また夏休み教職員向け研修講座では銅鐸や開化錦絵を活用した連携事業を紹介。教育現場の先生方や幅広い年齢層に地域の歴史や美術について理解を深めていただくことができ、意義ある取り組みとなった。 | | A |
| □地域資料の展示 | 出品点数： 港都情景 18点、 阪神名勝図絵 30点、 絵画コレクション展 23点 | 特別展「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」では、当館蔵の桜ヶ丘銅鐸に加えて、かつて神戸市域から出土し、現在は他館が収蔵する銅鐸についても、ご覧いただく機会を提供することができ、大変有意義であった。また、ギャラリーでは、「川西英「港都情景」」「大正時代への小旅行」「絵画コレクション」と、続けて神戸の美術や歴史に関する企画を実施し、数多くの地域資料を紹介することができた。 | | A |
| □新聞雑誌や講演会での情報発信数 | 22年度：図録4、紀要論文4、だよりノート2、個人の館外発信29件 23年度：図録2、個人の館外発信22件、 24年度図録3、研究紀要5、個人の館外発信数19件 | 昨年度と比べ数値は前後するが、質的にも充実し、新聞雑誌の情報発信数は多く、所蔵資料について新たな研究成果を講演や論文等で市民に発信することもできている。また開館30年を記念したシンポジウムを開催し、その成果を紀要により広く発信することができた。加えて新総合案内『ホンモノに会いに行こう 神戸市立博物館で楽しむ歴史と美』を出版社と連携して発行、地域の歴史の情報発信に努めることができ、30年にふさわしい意義深い取り組みとなった。 | | A |
| □地域史に関する対応件数 | 21年度：749件、うち地域史関係143件、その他15件 22年度：740件、うち143件、16件 23年度：811件、うち204件、15件 24年度：748件、うち138件、17件 | 大河ドラマ『平清盛』が放映され、展覧会も開催された昨年に比べると、特別利用の件数はやや減少したが、対応件数は例年より増加した。また、各学芸員が、地域史や地域の資料についての様々な問い合わせに積極的に対応した。 | | A |
| ○関連資料のDBの構築 | DBの公開については、市役所内一組織として取り組んだ場合、技術的・予算的な面で制限が多い。また、これを公開することによって、専門研究者以外の一般市民にどのようなメリットがあるのか、疑問な部分も多い。他の地方公立館の状況も踏まえながら(1)今年度大幅にリニューアルして好評を得ている名品撰の拡張(2)文化庁主催の文化遺産オンラインへの取り組みを強化、以上2点を軸に所蔵品情報の公開を行なっていきたい。 | | | F |
| □DBの利用数 | データベースの公開は0。 | 職員DBによる画像検索態勢は整いつつあるが、分野によってはまだ未入力・未整理のものも多い。 | | F |

| | | | | | |
|----------------------------------|---|--|---|---|---|
| ◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します | 懸案であった資料を購入し、また地元資料を寄贈により収集できているのは、所蔵者をはじめとした、当館の活動に対する市民の信頼があつてのことといえる。今後とも市民の信頼を得ながら、関係方面の理解を得て、継続的な収集が図られるよう努めていく必要がある。 | | A | | |
| ○特色ある館藏品等の充実、収集方針の明示と実績の公開 | 館の努力が認められ、市の理解を得て、長年の懸案であった、経常予算では購入できない資料の購入が実現したことは十分に評価できる。また地元の資料が寄贈されたのは長年の活動の成果といえる | | | A | |
| □資料収集数(購入) | 19年度：2件7点3,335千円、 20年度：0件0点0円、 21年度：2件2点369千円、 22年度：9件11点40,549,48千円、 23年度：10件3,118,448千円 | 歴史資料10件5,460,500円、美術資料6件6,977,250円など合計17件12,482,750円を購入した。地函資料に適切な資料がなかったが、歴史、美術資料ともに、かねてより懸案であった資料を購入することができた点十分に評価できる。 | | | A |
| □資料収集数(寄贈) | 19年度：123件647点評価額16,973.6千円、 20年度：50件84点同20,296千円、 21年度：214件405点同3,996千円、 22年度：1005件4989点同40,090.9千円、 23年度：19件5119点同805,349千円 | 歴史資料6件752点(評価額1,376,900円)の寄贈を受け入れ。収集資料について、資料カードの充実、保存と活用(資料台帳、データベース、収蔵庫内検索)を計画的にすすめ、安全で適正な収納と館内でのデータ共有化をはかる必要がある。 | | | A |
| □資料収集数(寄託) | ○ | 歴史資料1件3点受け入れ。常設展示において展示活用している。保存と活用(資料台帳、データベース、収蔵庫内検索)を計画的にすすめ、安全で適正な収納と館内でのデータ共有化をはかる必要がある。 | | | B |
| ◎社会的資産としての文化財(館藏品)を保全し、後世に伝えます | 限られた予算や態勢の中で文化財保全の努力を重ねてきているが、施設ハード面においては不安要素を抱えている。また、永年保存の観点からの保全努力の実施とともに、東日本大震災後の危機管理についても随時検討する必要がある。 | | B | | |
| ○方針の明示 ○良好な収蔵環境の整備 | モニタリング・生物環境調査、清掃などは計画通り適正に実施。収蔵庫においては虫類の発生がほとんど見られない結果にある。ただし、良好な収蔵環境の整備と維持には、設備の改善を含め、課題が少なくない。 | | | B | |
| □収蔵(保存)環境の調査・整備(IPM) | モニタリング・生物環境調査、清掃などは計画通り適正に実施した。収蔵庫のモニタリングについては、博物館事業との関係で毎月実施できていないが、虫類の発生がほとんどみられない結果が得られており、環境の把握に問題はなかった。また、近年の受入資料などについて包み込み燻蒸を実施したが、一方で燻蒸室が作品の仮置場となって、本来の目的に使用できていない。また、除湿機の運用で湿度を管理している収蔵庫11は、空調吹き出し口とダクトの配管の不具合などハード面の改善が必要である。なお、収蔵庫10・11以外の資料の収蔵場所については、環境整備と資料整理が急務である。 | | | | B |
| ○資料の保全 | 限られた予算であるため、より一層計画的で時宜を得た執行に努める必要がある。補修が必要な資料のリスト化など、補修以前の取り組みの充実が必要。 | | | B | |
| □資料の補修 | 20年度：169点 21年度：315点 22年度：35点 23年度：79点 24年度：7点 | 限られた予算の中で、資料の状態等を考慮しながら、緊急度の高い資料について実施することができた。 | | | B |

| | | | | | | | | |
|--|--|---|----------------------|---------------|--|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> 大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開 | 当館HPの大震災コーナーへのアクセスが増加している。情報や経験の公開・発信について役割を果たしている。 | | | | | A | | |
| <input type="checkbox"/> 大震災の記録の利用 | 16年度：11717件 17年度：10683件 18年度：12857件 19年度：13272件 20年度：11778件 21年度：15130件 22年度：9747件 23年度：10932件 24年度：11447件 | 東日本大震災ののち、阪神淡路大震災の被害と復旧の実態に対して再び関心が高くなり、アクセス数が増えている。また、館への問い合わせやオリエンテーションなどの希望もあり、随時ホームページの存在を紹介している。紙資料・ホームページいずれも、貴重な情報として再認識されている。 | | | | A | | |
| <input type="checkbox"/> 館蔵品に関する情報開示の整備をおこないます | 歴史資料の分野で画像アーカイブの構築が遅れているが、全体として質量ともに大幅な整備が行われ改善が図られた。 | | | | A | | | |
| <input type="checkbox"/> 館蔵品情報の継続的な発信 | 高精細画像など、HPでの公開は大幅に進捗し、好評を博している。また印刷物での公開も計画通りに進んでいる。 | | | | | A | | |
| <input type="checkbox"/> 館蔵品目録の継続発行 | 美術の部・歴史の部各1冊を刊行 | 美術の部・歴史の部各1冊を刊行 | 美術の部・歴史の部各1冊を刊行 | 100% | | A | | |
| <input type="checkbox"/> 館蔵品の特別利用数 | | | 780件 2209点 | 650件 2480点 | 83% 112% | | A | |
| <input type="checkbox"/> ホームページへの掲載 | 23年度まで101件 | 240件 | 240件 | 100% | | A | | |
| <input type="checkbox"/> 博物館資料DBの構築 | DBの構築については、美術・古地図資料については順調に進み、市民からの様々な問い合わせや写真利用の申請に対して迅速に対応できる態勢が整っている。今後は、歴史系資料のDBの構築を急ぎ、特に市民からの要望が多いと思われる景観資料の情報公開について具体化を進めていきたい。 DBの公開については、市役所内一組織として取り組んだ場合、技術的・予算的な面で制限が多い。また、これを公開することによって、専門研究者以外の一般市民にどのようなメリットがあるのか、疑問な部分も多い。他の地方公立館の状況も踏まえながら(1)今年度大幅にリニューアルして好評を得ている名品撰の拡張(2)文化庁主催の文化遺産オンラインへの取り組みを強化、以上2点を軸に所蔵品情報の公開を行なっていきたい。 | | | | | F | | |
| <input type="checkbox"/> データベースのアクセス件数 | | | 新名品撰アクセス数： 212482 | 0% | データベースの公開については、その基幹となる画像アーカイブの構築が急務だが、神戸の地域史に関わる資料の入力で一部進捗が止まっている分野（絵葉書・古写真・絵地図・池長孟関連資料など）があり、その作業完了が25年度の優先課題と思われる。24年度からは、数年来行ってきた入力作業の最初の公開事業として、新名品撰を8月から公開したが、年度末まで21万アクセスを記録するなど反響が大きかったことから、コスト的な懸念が皆無の「名品撰の大幅拡張」を軸に情報公開を進め、そのアクセス数に注目していきたい。 | | | F |

| | | | | | | | | |
|--|--|--|---|------------|---|---|---|---|
| <p>すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします</p> | <p>開館30年の筋目の年にふさわしく、国宝「桜ヶ丘銅鐸」をはじめとする質の高い考古資料、重要文化財「泰西王侯騎馬図」（サントリー美術館）を代表とする南蛮美術の名品、フェルメール「真珠の耳飾の少女」など17世紀絵画の至宝、中国古代の工芸品の数々を展示し、一年間、息もつかせぬ特別展の開催で、多くの来館者に喜びと感動を届けることが出来た。あわせて常設のびいどろ史料庫コレクション室を新設して同庫の名品を陳列し、上質の和ガラスにふれる機会を作った。</p> | | | | A | | | |
| <p>◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行ないます</p> | <p>常設展示を魅力あるものにするにはどのようなリニューアルが必要か、将来を見据え、具体的に検討する段階にいたったことは評価できる。</p> | | | | B | | | |
| <p>○常設展示の内容の更新・拡充・整備</p> | <p>経常的な業務はほぼ計画通り実施され、またびいどろ史料庫の展示室開室に伴い常設展示室の一部が見直されたが、常設展示の内容や設備について、開館30年の活動実績を踏まえたリニューアルに向け、引き続き、検討する必要がある</p> | | | | | B | | |
| <p>□展示替え</p> | <p>23年度：24回 24年度：23回</p> | <p>今年度は、常設展示室1の「海運と商業」展示室の縮小、「ビードロ・ギヤマン」ケースの撤去、展示室2の「交通の発達」展示室の「びいどろ史料庫コレクション」展示室への転換などに伴い、常設展示室のスペースが全体として縮小されたが、例年通り、約150点の資料の展示替を行った。</p> | | | | | A | |
| <p>□常設展示内容</p> | <p>常設展示室1の「海運と商業」展示室の縮小、「ビードロ・ギヤマン」ケースの撤去、展示室2の「交通の発達」展示室の「びいどろ史料庫コレクション」展示室への転換を実施した。</p> | <p>展示を工夫することによって、資料や展示のストーリーをより身近に感じてもらうことができた。とくに、寄贈資料の展示や、ギャラリーでの独自の企画も、来館者の方々に好評を博した。</p> | | | | | A | |
| <p>□展示解説開催数</p> | <p>平成21年度実績：実施日数84日、参加者数194人、平均3.5人。 22年度：84日、873人、平均11人。 23年度：61日、271人、平均4.4人。</p> | <p>参加者1日平均5人程度</p> | <p>平成24年度：実施日数69日 参加者数321人、平均4.7人、参加者のいない日数15日。</p> | <p>78%</p> | <p>今年度も、常設展のみの開館日数は少なかったが、昨年度より、参加者総数、一日平均の参加者数は微増した。</p> | | | B |
| <p>□展示設備・施設の改修</p> | <p>びいどろ史料庫の展示・保管のため展示室の一部で改修、展示場所の変更等を実施した。</p> | | | | | | B | |
| <p>◎特色ある館蔵品を活かした展示を行います</p> | <p>開館30年の記念の年にふさわしく、コレクションを核にテーマを展開した企画が続いたが、魅力の発信という点ではあらためて課題を残した。広報だけでなく、他の問題も含め魅力を伝えるにはどのような工夫が必要か、検討を重ねる必要がある。</p> | | | | A | | | |
| <p>○調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 ○南蛮・古地図の企画展の開催</p> | <p>コレクションを代表する国宝桜ヶ丘銅鐸をテーマとした特別展、池長コレクションを中心としたソウル展の帰国展として開催した南蛮美術企画展、古地図企画展など、開館30年にふさわしい展覧会を開催し、高い満足度を得た。しかし努力に比して入館者数がどうしても伸びないなど、課題も多く、有効な方策について引き続き、検討が必要である。</p> | | | | | | A | |

| | | | | | | | | | |
|-----------------------|--------------------------------|--|---|---|-------------------|--|--|---|---|
| | <input type="checkbox"/> 展覧会開催 | 特別展「桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」 南蛮企画展「Meeting with the West—西洋と出会った江戸美術」 古地図企画展「海と陸のみち—江戸時代を旅する」 | 特別展「桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」では絵画銅鐸を核にして銅鐸の謎に迫り、南蛮企画展「Meeting with the West—西洋と出会った江戸美術」はソウル展の帰国展でもあり、開館30年を記念した展覧会として、当館が誇るコレクションの魅力を十分にアピールできた。 | | | | | | A |
| | <input type="checkbox"/> 入館者数 | | 入館者数17,000 | 10,865人 | 目標入館者数達成度 0.64 | 目標入館者数に及ばなかったが、入館者の関心は高く、十分な満足していただいた。 | | | C |
| | <input type="checkbox"/> 満足度 | 「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」展：85.7 | 「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」展は、満足度85以上の目標を達成。 | | | | | | B |
| ◎海外展などの特別展を開催します | | 「マウリッツハイス美術館展」に代表されるように、市域内外から多くの人々が博物館に来館する機会を提供でき、開館30周年という節目の年にふさわしく、充実した年であった。次年度以降についても、メディアとの共催特別展において、質の高い作品を紹介していくことが望まれる。 | | | | | | A | |
| ○国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介 | | 「マウリッツハイス美術館展」では、真珠の耳飾りの少女をはじめとするオランダ・フランドル絵画の名品を展覧会で紹介することができ、館の歴代4位となる42万人を超える入館者をえた。また「南蛮美術の光と影」では、来館者数という当初の目標はクリアできていないが、サントリー美術館と協力して泰西王侯騎馬図に焦点をあてた展示が実施でき、特色ある当館のコレクションの再評価が図れた。「中国 王朝の至宝展」では、尖閣問題などで開催が危ぶまれたが、最新の中国考古学の発掘成果などを紹介できた。 | | | | | | A | |
| | <input type="checkbox"/> 特別展開催 | 23年度 平成23年3月12日～6月12日「大英博物館 古代ギリシャ展」 「プーシキン美術館展」（東日本大震災の影響により中止） 平成24年2月25日～4月8日「平清盛」 | 開館30年の節目の年として、神戸ゆかりの平清盛、南蛮美術、桜ヶ丘銅鐸にスポットをあてた特別展を開催できたことは意義深いことであった。一方で、42万人を動員した「マウリッツハイス美術館展」や、日中国交正常化40周年を記念した「中国 王朝の至宝」などの充実した大型特別展は、神戸にいながらにして世界の名品を鑑賞できる機会となった。「国際文化交流—東西文化の接触と変容」という当館のテーマにふさわしい特別展を開催できたといえる。 | | | | | A | |
| | <input type="checkbox"/> 入館者数 | 「平清盛展」：48,577人（1,278人/日）※23-24年度通算 「南蛮美術の光と影」：27,373人（702人/日） 「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」：10,865人（247人/日） 「マウリッツハイス美術館展」：424,625人（4,938人/日） 「中国 王朝の至宝」：87,180人（1,557人/日）※24-25年度通算 合計 598,620人 | | 598,620人 | 104% | | | A | |
| | <input type="checkbox"/> 満足度 | 「南蛮美術の光と影」展：86.1 「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」展：85.7 「マウリッツハイス美術館」展：81.6 「中国 王朝の至宝」展：82.1 | 全展覧会で満足度指数85以上 | アンケートの改良を図り、毎日アンケートを実施。入館者の多い展覧会は、満足度が下がる傾向があるが、適宜、来館者の要望に沿うよう努力した。 | | | | | B |

| | | | | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|---|--|---|
| <p>芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします</p> | <p>学校連携および子ども向けの事業に関しては、ほぼ人的に限界に達する事業数を行っている。地域や他館との連携は、展覧会関係において概ね図られており、特に今年度はサントリー美術館との緊密な連携による大型展を開催することができた。今後の課題は、学校連携や生涯学習にかかる各種事業および他館や地域との連携活動を陳腐化させることなく、あらたな事業の開発や展開を行う必要がある。</p> | | A | | | |
| <p>◎学校との連携を図ります</p> | <p>学校との連携は十分に図れている。利用者が交流するという目標は果たしている、今後も博物館活動の柱の一つとしてより充実させるよう努める必要がある。</p> | | A | | | |
| <p>○学校との連携</p> | <p>学校との連携は十分に図れている。今後ともハード・ソフトの整備に努める必要がある。</p> | | | A | | |
| <p>□小・中・高等学校の受入数</p> | <p>※単位は校 20年度 幼：6 小：60 中：84 高：32 その他（大・専など）：43 計225校11,092人 21年度 幼：1 小：52 中：57 高：20 その他（大・専など）：23 計153校6,812人 22年度 幼：1 小：52 中：83 高：44 その他（大・専など）：55 計235校9,457人 23年度 幼：0 小：47 中：165 高：49 その他（大・専など）：54 計315校10,652人 24年度 幼：0 小：49 中：80 高：26 その他（大・専など）：62 計217校7,914人 過去5年間の平均校数、人：229校、9185人</p> | <p>学校園の要望に沿ったかたちで、来館への対応（幼稚園0、小学校49、中学校80、高校26、その他62 計217校園7,914人）、オリエンテーション（来館校園のうち19.8%）、またトライやる（13校28人）の受入など、適切な受入が図られている。</p> | | | | A |
| <p>□連携数(出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数)</p> | <p>※単位は校 20年度 幼：1 小：44 中：9 高：0 計 54 21年度 幼：0 小：64 中：10 高：2 計 76 22年度 保：1 小：87 中：14 高：2 大：1 計105 23年度 幼：0 小：23 中：18 高：6 大：4 計 52 24年度 幼：0 小：95 中：14 高：1 特別支援：1 計111 5年間の平均 幼・保：0.4 小：62.6 中：13.0 高：2.2 大：1 特別支援：0.2 計79.4</p> | <p>可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。小学校95、中学校14、高等学校1、特別支援1 合計111校</p> | | | | A |
| <p>□教員研修の受け入れ</p> | <p>20年度 4回 232人 21年度 8回 44人 22年度 5回301人 23年度 5回157人 24年度 8回392人 5年間の平均6回 225.2人。</p> | <p>今年度も、8年目研修など、実態に即した研修の受け入れを行うことができた。①高校地歴公民部総会100名、②中学校教育課程研究会社会科研究部34名、③高校地歴公民部幹事会13名④中学校教育課程研究協議会（社会科）117名、⑤福岡県高等学校歴史研究会23名⑥8年目研修15名、⑦美賀多台小校内研修23名、⑧中学校社会科研究研修会67名</p> | | | | A |

| | | | |
|--|---|--|---|
| <input type="checkbox"/> 大学との連携事業数 | 20年度 23校39名 21年度 20校34名 22年度 16校28名 23年度 18校29名 24年度 17校26名 5年間の平均18.8校31.2人。 | 博物館実習のカリキュラムはほぼ例年通り実施した。本年の課題を博物館に展示されている作品から1作品(資料)を選択し、①作品キャプションと解説キャプション(200~400字程度)②レポートを作成する。として、最終日、作品の横において実習生も含めて講評しあい、有意義な成果が得ることができた。また、交流員とともにめぐる居留地散策は、実習生、交流員の双方に好評で、相互に刺激しあうプログラムとなった。大学の博物館実習などへの協力についても、見学、オリエンテーションなど幅広く協力した。 | A |
| <input type="checkbox"/> 教育普及プログラムの確立 | 24年度は文化庁補助事業が不採択であったにもかかわらず、職員の努力や工夫により例年通りのプログラムが履行されている。 | | A |
| <input type="checkbox"/> 教育普及プログラム数・内容更新 | 23年度実績(連携授業:保育園1園、小学校103校、中学校12校、高等学校0校、大学その他2校 来館:小学校1校) | 予定通り制作し、連携授業や学校団体来館時に活用することができた。「浮世絵」の授業については、昨年度13校に引き続き、今年度12校と安定して利用されている。 | A |
| <input type="checkbox"/> 子ども向け事業の展開 | | 定例的な事業については例年どおり円滑に実施されている。展覧会に付帯する臨時的な事業については、より一層周知を図り、事業に努めることが肝要である。今年度も、ホームページ・広報紙KOBEでの広報活動を行うことができた。 | A |
| ◎地域との連携を図ります | メディアなどの共催による展覧会では、各種団体の協力を多く委ねることになるが、地域の博物館として地元と密着した協力体制が形成されているものと考えられる。今後とも継続していくことが望まれる。 | A | |
| <input type="checkbox"/> 居留地協議会、周辺商店街等との連携 | 従前とおりの活動に加え、各種団体などとも連携が図れている。また居留地や三宮といった地域の施設としての役割を担う活動が行えている。 | | A |
| <input type="checkbox"/> 連携数など | ①旧居留地協議会と協力して「散策ガイド」を発行、会報に紹介記事掲載。9月15日ブロムナードコンサートを館内で開催。9月30日開館30年記念シンポジウムを開催。②大丸と相互に料金割引を実施、またポスター掲示、飲食店街での特典など連携を実施。③「中国展」では南京町商店街振興組合と連携して「KOBEカルチャイナ」(2月3日)、春節祭の龍踊りを実施。同パンフレットに展覧会案内④「マウリッツハイス美術館展」では近隣のレストラン・カフェとタイアップサービス等を実施。 | 旧居留地協議会とは、コンサートやシンポジウム開催など新しい協力関係を築けた。南京町とも共同イベントを実施できた。今後も可能な催しがあれば計画・実施していきたい。 | A |

| | | | |
|---------------------------|--|---|---|
| □共催事業など | ①神戸外国語大学：共同企画セミナー「『南蛮美術の光と影 泰西王侯騎馬図屏風の謎』への誘い」を外大で開催（5月16日）。○開館30年記念シンポジウムを共催（9月30日）。②共催事業「神戸・阪神歴史講座第6回」6月17日。③神鉄観光主催「朝日・神鉄スタンプ・クイズラリーde清盛」に協力し、神鉄の駅に「中国展」ポスター掲示。 | 神戸外国語大学とは、セミナーやシンポジウム開催など連携協力を実施できた。今後も、さらなる連携事業をできるように務めたい。 | A |
| ○生涯学習の支援 | 例年より増加している以外に、神戸市外国語大学との間で地域貢献などを目的とした連携について締結し、相互の人的・知的資源の交流・活用をはかるようになったことは注目される。今後、地域への講師派遣などでより充実した内容の連携になるよう調整を図る必要がある。 | | A |
| □連携数(出前講座・講師派遣など連携事業数) | 20年度 25件 21年度 15件 22年度 25件 23年度 23件 24年度 31件 | 神戸市外国語大学と協定を締結し、博物館でのシンポジウムにおける大学から通訳協力、博物館から講師を派遣して、大学で講演をおこなうなど、積極的な相互交流をおこなった。また、大学での非常勤講師、地域への講師派遣とともに、例年より本年度は増加している点、評価できる。 | A |
| ◎他の博物館・美術館との連携を図ります | 資料の貸出や他館との連携については図れている。今後は展覧会にとどまらず、他の連携の可能性も模索していくことが望まれる。 | | A |
| ○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開 | サントリー美術館との協力による特別展「南蛮美術の光と影」のほか、館外の資料貸出については従来どおりなされている。また、東日本大震災に関しては全国美術館会議の諸活動やシンポジウムなどに職員を派遣して、活動が行っている。 | | A |
| □他館での館蔵資料の発信 | 平成23年度：申請数31件（貸出先32件）135点 平成24年度：申請数31件（貸出先33件）153点 | 考古・歴史・地図・美術の各分野の展覧会にバランスよく作品を貸し出す結果となっている。これまでの貸し出し実績も含めて、南蛮美術の一部作品に貸出が集中する傾向にあり、作品の状態を十分に確認・協議したうえで、他館での展示に協力した。 | A |
| □他館での委員、講師など | 他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 20年度 22件 21年度 15件 22年度 17件 23年度 25件 24年度 28件 | 依頼に応じて専門性を生かした委員・講師などの館外活動を実施している。 | A |
| □他館との共催事業 | ①サントリー美術館・東京文化財研究所と共催・協力して「南蛮美術の光と影」展開催。集荷・展示・撤去・返却や図録作成・講演会も分担する。②東京都美術館と協力して「マウリッツハイス美術館展」を開催。図録執筆・講演会への講師派遣も協力等。 | サントリー美術館等と協力して、当館の南蛮美術コレクションを新しい視点から探る特別展を開催できた。これからも協力できる展覧会があれば、連携・参加していきたい。 | A |
| ◎各種講座を一層充実します | 新たなものはなく、例年通りの講座であるが、長く続けることにより広く市民・参加者に認知されていると考えられる。しかしながらよりいっそうの充実が求められる。 | | A |

| | | | | | | | | | |
|------------------------|---|---|--|---|---|---|---|---|---|
| ○講座内容の開発、充実 | 各種講座の実施によって、生涯学習の場としての機能は果たしている。また、これら講座を通じ館が所蔵している資料の魅力も伝えられている。しかしながら、より一層新講座の開発が求められる。 | | | | | A | | | |
| □事業数 | 「たのしむ」3回、 「ミュージアム講座」6回、 ギャラリートーク4回、 イブニングレクチャー7回、 スライド解説会88回 | 定例の講座に加えて、特別展・企画展にあわせた講演会の開催ができた。特に、イブニングレクチャーは市民に直接、展示のみどころを伝えることができる重要な機会であり、継続の要望も多い。特別展では必ず開催するなど、検討が必要である。 | | | | | A | | |
| □参加者数 | | 博物館をたのしむ：15名、 ミュージアム講座：150名 | 講座「博物館をたのしむ」18名、 ミュージアム講座167名、 ギャラリートーク76名、 イブニングレクチャー422名、 スライド解説会1877名 | 当初計画通り、開催。 | 定例の講座に加え、イブニングレクチャーなど気軽に参加できる講座を展覧会ごとに継続して開催していくことが必要である。 また、事前募集型の講座については、参加者が固定化しないよう、広報手段を検討し、新規かつ若年・中年層の参加者を増やすことが必要である。 | | | A | |
| ○利用者ニーズの把握 | 講座の最終回にアンケートを実施しているが、それを踏まえた改善が行われているかの検討を行い、利用者のニーズを把握する必要がある。 | | | | | A | | | |
| □利用者満足度 | ①「たのしむ」計16：男性7、女性9。40代1、50代4、60代3、70代8。講座全体に興味があつた10、まあでた4、やや興味もてなかった1、無記入1。 ②「ミュージアム講座」計105名：男性34、女性71。講座全体で、興味があつた59、まあでた27、普通14、やや興味もてなかった1、もてなかった1、他（聞きたい講座のみ聞いた1）、未記入2。 | | | 「博物館をたのしむ」も「ミュージアム講座」もアンケート調査では、興味があつた。まあでた、と回答した人が多数をしめた。今後も興味が出る講座にすべく努力して、アンケートの成果を反映させたい。 | | | | | A |
| ◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します | さまざまな広報メディアへの対応が必要ではあるが、最近ではインターネットの影響が高まる一方の状況である。24年度は当館HPへのアクセス数が大幅に増加し、紙媒体以上にそのありかたを考慮する必要が生じてくるものと考えられる。 | | | | | A | | | |
| ○広報活動の充実 | 各メディアの配布部数や掲載料の有無なども考慮に入れて、効率のよい広報活動を展開することに、引き続き留意して行きたい。 | | | | | A | | | |
| □広報掲載件数 | 昨年度よりもインターネット上の各種展覧会情報サイトへの情報提供が増えた。今度も、積極的に情報提供していきたい。 | | | | | A | | | |
| ○HPの更新 | アクセス数倍増の理由は不明だが、大型展や開館30周年、名品撰リニューアルなど様々な要因が複合した結果ではないか。今後も市民の関心を喚起するコンテンツ公開を心がけたい。 | | | | | A | | | |

| | | | | |
|--|---|--|---|---|
| <input type="checkbox"/> HPの更新回数、ページ数、アクセス数 | 博物館HPアクセス実績 23年度 1,639,886 24年度 3,376,130 | 博物館HPへのアクセス数は23年度のおよそ2倍、ダウンロード量は2.4倍（88.39GB→211.6GB）に増加した。広く当館のHPを見てもらう機会が増えたといえる。一方で、「マウリッツハイム美術館展」関連のアクセスは博物館HP全体の約9%、名品撰は約6%であり、大幅な増加の理由は要検討である。 | | A |
| <input type="checkbox"/> メール会員向けの新たな情報発信事業の開発 | メールマガジンの情報発信は一部の自然科学系の博物館では機能しているが、人文系の博物館で成功した例は見当たらない。この評価項目は時代にそぐわないので改善が必要。現在注目を集めているTwitterや FacebookなどのSNSの導入を検討すべきである。 | | | F |
| <input type="checkbox"/> メール会員への発信数、メール会員数 | | 情報発信の方法として、メールマガジンは市民のニーズに合致しているとはいえない。また、Twitter等も一方的な発信になるならば導入の意味合いが薄れ、負担だけが大きくなる。博物館HPをより充実させていくことで、市民への情報発信に努めていく。 | | F |
| ◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行ないます | 24年度は大量動員の展覧会もあったが、年間を通じて毎日のアンケート回収・回覧はスムーズに進行し、できる範囲の対応は行うことができたと思われる。空調環境や照明設備など苦情の多かった問題についても25年度は大幅な進展が期待できる。 | | B | |
| <input type="checkbox"/> 定期的な利用者へのアンケート調査 <input type="checkbox"/> 非来館者を含めた意識調査 | 全期間の全項目集計に時間がかかることは、交流員の協力得ても時間がかかったのは致し方ないところがあるが、中間集計などで会期中に各展覧会の動向が把握でき、問題点の把握・改善に向けた努力が行われたことは確かである。25年度も引き続きこの態勢で迅速な対応を行なっていきたい。 | | | C |
| <input type="checkbox"/> アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握 | | 「銅鐸展」・「マウリッツハイム展」・「中国展」ともコメント欄PDF化、NSI算出、回覧を毎日行なった。ただし、集計は数が多いので、会期終了後1ヶ月以内に終了させることは無理であった。アンケートに記入されたキャプションの間違い等対応可能な事は、訂正などをおこなった。さらに、照明に対する苦情も、ライトの調節をおこなうなど入館者の要望に沿うように改良した。 | | B |
| <input type="checkbox"/> HPへの掲載・公開 | | 館内での「公開の是非」の検討が必要 | | C |
| <input type="checkbox"/> アンケート評価への対応と改善 | | アンケートに記入された内容で、すぐに対応可能なことは、改善・実施した。さらなる活用については、今後の課題。 | | B |
| ◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります | 交流員の活動が定着することにより、来館者をはじめ人々の交流できる場をいくばくとも提供できている。また、六甲アイランドにおけるRICアートカプセルや神戸ゆかりの美術館との協働などはあるべき姿といえる。 | | | A |
| <input type="checkbox"/> ボランティア活動の実施 | 交流員の活動は定着しており、例年に比しても遜色ないものと思われる。ぜひ新たな活動にも取り組んでもらいたい。 | | | A |

| | | | | | |
|---|--|--|---|--|---|
| <input type="checkbox"/> 実績(人数、回数、内容) | 平成21年：延227人 平成22年：延719人 平成23年：延570人／活動回数114回 平成24年：延588人／活動回数125回 | 日々の活動内容や学習支援交流員が普段考えていることを考慮し、今年度の活動は、研修、定例会、ワークショップの開催、博物館事業への支援、他館との連携活動など10項目の活動内容とした。今までの活動は、学習支援交流員が企画・運営するワークショップや教育普及ツールの開発が活動の中心となり、偏りがあったが、各学習支援交流員の興味・関心、活動に対する目標や意欲などを聴取し、より良い活動環境と活動の場を広げることに心がけた。これにより、活動参加人数及び回数ともに前年度を上回り、数値だけでは過去最高となった。 | | | A |
| <input type="checkbox"/> 活動内容の充実 | 小磯記念美術館や神戸ゆかりの美術館との連携など、活動に幅がでてきたことは確かである。今後ともあらたな挑戦を望みたい。 | | | | B |
| <input type="checkbox"/> 活動内容 | | 目標としている事業を創出するための活動が充実して行えていたかは、評価判断が難しいが、これまでになかった他館との連携事業を経験することによって、新たな活動等の方向性が各学習支援交流員に芽生えたといえる。 | | | B |
| すべての人々にやさしい博物館にします | | リニューアル基本計画が策定できた。ユニバーサルデザインへの対応など課題は残ったが、空調設備の改修工事費が補正予算で認められた。 | B | | |
| ◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。 | | 空調設備の改修工事費が予算化され、今後も大型海外展の開催が可能になったが、ユニバーサルデザインに配慮した改修計画については出来なかった。施設の老朽化対策とあわせ、誰でも利用しやすい施設となるよう勤めていきたい。 | | | B |
| <input type="checkbox"/> 施設の計画的な補修、改修 | | 館運営に支障のあるような故障はなかったが、綱渡り状態のときもあった。 | | | B |
| <input type="checkbox"/> 省エネルギー・省資源への取り組み | | 空調設備のリニューアルが先行実施されたが、ユニバーサルデザインの視点からの改善計画は織り込まれなかった。 | | | B |
| <input type="checkbox"/> 消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保 | | 急な故障等、館の運営に支障の出るような問題は発生しなかった。 | | | B |
| <input type="checkbox"/> 神戸環境マネジメントシステムを生かした環境負荷の低減 | | KEMSで学んだ環境負荷低減方法を実践しながら、環境負荷低減に取り組んだ。 | | | B |
| <input type="checkbox"/> ユニバーサルデザインへの対応 | | 予算額の制約からより緊急度の高い空調設備の改修工事を先行して実施することになったが、今後、施設の老朽化対策と並行して、ユニバーサルデザインに配慮した施設になるように努力していく | | | C |
| <input type="checkbox"/> ユニバーサルデザイン取組 | | 予算額の制約から、空調設備の改修工事のみ行うことになり、ユニバーサルデザインに配慮した改修工事については今回見送りになった。 | | | C |

| | | | | | |
|---------------------|--------------------|--|--|--|---|
| ◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します | | スタッフ一同入館者が来館してよかったと思っただけのよう努力した。ただ一部の日で、待ち時間が1時間を超えるなど施設の大きさの問題もあり、すべての方に喜んでいただけなかった。 | | | B |
| | ○人的サービスの充実 | 特別展「マウリッツハイス美術館展」については、入館者数が多く、施設の想定を大きく上回る入館者が来館し、非常な混雑であった。スタッフ一同努力を重ねたが、待ち時間等の問題もあり、十分に対応できたとは、いいがたい。 | | | B |
| | □館内の運営協力体制 | | 委託先との連携を十分に行った結果、博物館の運営に支障をきたすような大きな問題は起こらなかった。 | | B |
| | □職員の研修 | | 館や学芸員に必要な研修や講演については、参加できるようにした。 | | B |
| | □利用者サービス | | リニューアル実施計画のうち空調設備の改修に着手できた。作品保護の環境は整うが、その他の設備は旧来のままで、多くの入館者が入った際には、トイレの少なさを指摘された。 | | B |
| ◎予算の充実に努めます | | 必要な予算の最低限の目標は獲得した。また空調設備の改修予算も補正予算で獲得でき、今後とも、博物館での海外大型展開催に向け支障がなくなる見込みである。神戸市財政は厳しい状況であるが、今後も予算の獲得に勤めたい。 | | | B |
| | ○予算の充実 | 必要な予算は獲得できた。また、空調設備の改修工事のための予算も補正予算で獲得できた。 | | | B |
| | □支援金・助成金の獲得 | | 不況の影響から民間企業からの寄付は受けられなかった。海外展の協賛企業があるなかで難しいかも知れないが、一企業ではなく、いろいろな企業・団体からの寄付を受けられるような体制づくりが必要である。 | | B |
| | ○活動指標の内部評価と外部評価の実施 | 委員、職員のがんばりで評価をこなしているが、従来の仕事に加え点検評価を行うため、協議会委員や職員には従来以上の仕事量になっている面もある。評価にあたってできるだけ簡単な指標を用いるなど工夫が必要となる。 | | | B |
| | □自己点検、評価システム | — | 計画通りに事務が進まない問題点があり、事務が煩雑にならないような工夫や改善が必要。またこの自己点検評価を有効に活用していくため、計画、目標の設定時点での十分な意見交換など、充実を図っていくとともに、今回が5回目の自己点検評価となるため、今後の修正・改善に向けて検討を進める必要がある。 | | B |